藻類 Jpn. J. Phycol. (Sôrui) 59: 104–106 July 10, 2011

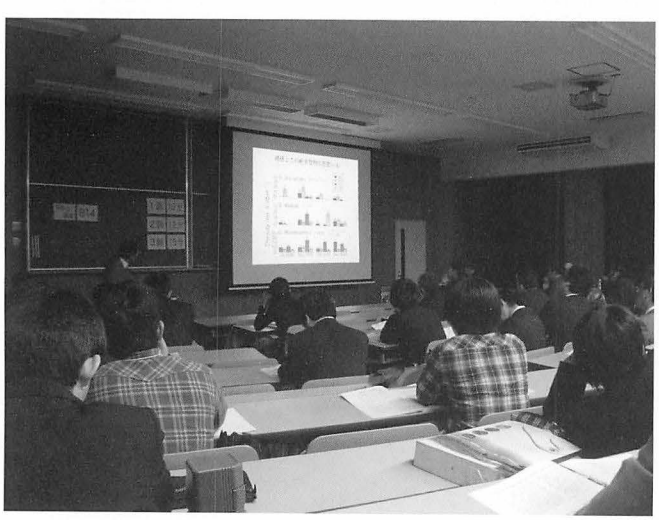
日本藻類学会第35回大会開催記・参加記

渡邊　信：大会開催をふりかえって

大会開催を目前にした3月11日午後に東日本太平洋沖地震が起こり，マグネチュード9.0の激しい揺れと，その直後にはこれまでに想定されたことのない大津波が東北太平洋岸を襲いました。それまでは人の住む賑やかな海岸の街が一瞬にして破壊され，すべてを奪いさってガレキと化してしまいました。亡くなられた方や行方不明の方の数はニュースの度ごとに増加し，その何倍もの人たちが緊急の避難生活を強いられるという悲惨な状態が現実におこったのです。またこの大地震のために，福島県の海岸にある原子力発電所が損壊し，当初，被害はさほどではないと発表していながら，日を追うごとに事態の深刻さは増し，臨界点爆発という最悪のシナリオを回避するために懸命に海水で冷却するという作業が続けられていました。原発の状況はどんどん悪化し，それにともなって避難地域は広がり，多くの人が故郷を離れて疎開するという事態になっていきました。

このような大地震発生と津波の被害のニュースをみてすぐに，このような困難の中で学会を開催できるだろうか？という思いが頭をよぎりました。被害が甚大だった仙台や筑波，交通が寸断されてしまった東京などの関東一円で開催される学会は，いち早く開催を取り消しました。しかしこれだけでなく，地震の被害のなかった北海道や関西でもいくつかの学会が開催を見合わせることにしていました。朝に新聞で，夜にはテレビで大地震，津波，原発事故のニュースをみると，たとえ開催地が被害を受けていなくても，学会どころではないという気持ちになるのはもっともなことでした。

今大会を開催するかどうかについて堀口学会長と相談し，被害にあわれた方々の様子と，評議員の意見を学会長に聞いてもらって判断することにいたしました。被災され大会に参加できない方を思うと心苦しいのですが，研究を委託されている研究者や学生が成果を発表すること，また発表の場を保証する学会活動を円滑に行なうために開く総会は，大会開催の原点であり，粛々と実施しようという考えにいたりました。このことは堀口学会長と私の連名で参加予定者に3月15日にメールをお送りしたところです。しかしながら，被害の余りの深刻さを知るにつけ，恒例の懇親会を開催することはどうしてもできず，懇親会中止というプログラム変更を3月21日にお知らせいたしました。このように大会当日までには考えるべきこと，お知らせするべきことが多々あって悩みましたが，1週間ほど停滞していた準備を再開して，開催に備えました。



口頭発表の様子

3月24日（木）午後には理学部生物圏環境科学科の中村省吾先生と田中大祐先生が研究室の学生を集めてくださり，私の部屋の学生と合わせて16人の学生アルバイトとともに会場設営の準備を始め，翌25日（金）の朝から本格的に会場設営を行ないました。

3月26日（土）朝9時に，大会プログラムが始まる前にテニスで体を動かす人のためにテニスコートを開錠しました。昨日まで雨が降ったりやんだりの天気だったので，テニスができるかどうか心配でしたが，幸いコートの排水が良く，なんとか希望に応えられたようです。

午後1時から「ワークショップ1：藻類・藻類ウイルス・原生動物等の分離・培養法」が河地さん（国立環境研）のお世話で開催されました。先端的な基礎技術を紹介するもので，聴講者の定員は50人ということでしたが，軽くそれを超える盛況でした。多忙な河地さんの勤め先である筑波の国立環境研究所もかなりの被害があったようで，準備が大変だっただろうと思います。

また同午後1時からは，公開講座「富山県民のための昆布学」が藤田さん（東京海洋大）のお世話で開催されました。講師は富山から5人，県外から5人計10人で，テーマが富山県民にとってなじみ深く，関わる人も多いことからこのような陣容となりました。公開講座のパンフレットを県内の生涯教育関係の施設に配布するほか，とやま学遊ネットのwebサイトや新聞社に紹介記事の掲載を依頼，富山中央植物園友の会メーリングリストでの案内など広報につとめました。この日は生憎，寒冷前線が通過し，午後は雪がふるような寒い1日でしたが，多くの県民が来場し，関心の高いことが示されました。大震災のために新聞の催物紹介欄はなくなっていたのですが，翌日の朝日新聞の富山版には「昆布やワカメの

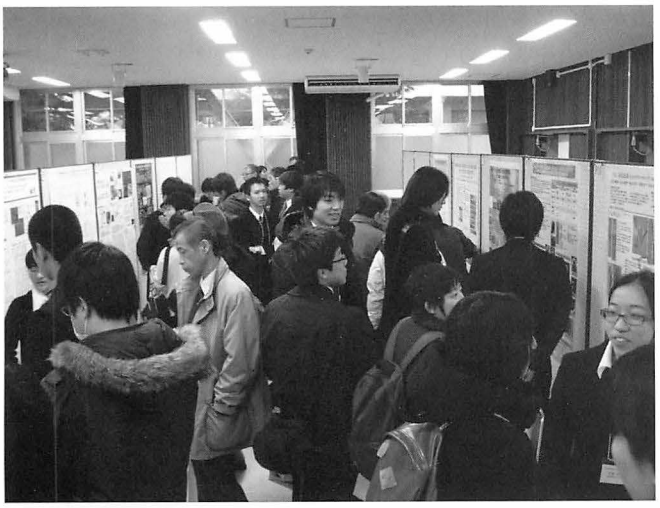
秘密に迫る一小学校も研究発表」という記事がでて，藻類学会の存在と公開講座の開催意義を富山県民にアピールするという一つの目標が達成されたと思います。

大会で行なわれる会議として，15:30~17:30 に編集委員会が，引き続き 17:30 から遅くまで評議員会が実施されました。私たちスタッフが校舎のほとんどの電灯を消して帰宅したあとの週末の夜，暗い校舎が立ち並ぶなか，評議員会の 3 階の 1 室だけが明々と点灯していたのは印象的でした。

この日は発表前日でしたが，ワークショップ 1，公開講座，編集委員会，評議員会等が開催されるので，受付とポスター会場を 14:00~17:00 にオープンすることにしました。ポスターを張る人は 5~6 人程度でしたが，約 80 人が受付にこられました。今回は懇親会費の払戻業務が増え，急遽 2 人のアルバイトを頼み机も用意することになりました。3 時間も受付を開いていたので，短時間に集中することなく好都合でしたが，受付や払戻の場所は外気温と同じでとても寒く，担当者には本当に気の毒でした。

3 月 27 日（日）の午前中は晴れて穏やかな天気でしたがまだ寒く，午後からは曇ったり少し雪かみぞれが降る天気になりました。口頭発表が 9 時から始まるので，受付は 8 時からオープンしました。ポスターをもった参加者が早くから受付にこられましたが，前日に約 1/3 程度の方が受付を終わっておられたので，大きな混雑もなく発表へとすすみました。

本大会の参加申込者は 234 人でしたが，主に東日本大震災の影響で 17 人が参加を取り消されました。当日参加は 22 人あり，結果的に 239 人が参加されたことになります。発表は口頭が 76 題，ポスターが 82 題の申込があり，合計 158 題というこれまでにない多数の予定でしたが，口頭で 4 題，ポスターで 5 題の取消がありました。被災地から申込まれた方たちには大地震のあとすぐにメールを御送りし，安否を尋ねました。何日もたってから無事であること，しかし大会には参加できなくなったことを知らせる返事や，発表はできなくなったけれど参加するという連絡をいただきました。無事のメールを受け取ると本当にほっとしたものです。開催することを皆さんに通知した後も，ひどい地震のために研究室がめちゃくちゃになり，そのラボからはだれも参加・発表できなくなったというメールが送られてきたり，当日になって参加できなくなり，共著者が発表するということもありました。参加できなかった方達がおられたことは本当に残念でしたが，多くの方がなんとか学会に参加しようと熱意をもっておられたことに心から敬意を払いたいと思います。



ポスター発表の様子

口頭発表が取消しになった場合，その時間は空き時間とし，取扱は座長に一任してありました。ただし，取消された演題の次演題はプログラム通りに進行していただきました。取消された発表の次が休憩時間になっていた場合もあり，空き時間は休憩にあてられたケースが多かったようです。

多くの学会で口頭発表者は，パワーポイントのスライドを USB で会場に持参し，それを発表用コンピュータに移して順次，発表するという方法をとっています。一方，今大会では既にいくつかの学会でしているように，各発表者が自分のパソコンをプロジェクターに接続して発表するという方法をとりました。これは，今ではパソコンを学会に持ってくる人が多いこと，自分のパソコンと会場のパソコンの機種・バージョンが異なるためにおこるトラブルを回避でき，スライド作成の自由度が増すことなどの利点があるからです。この方法では次講演者は自分のパソコンを立ち上げるとともに，プロジェクターのケーブル切替器に接続しておき，前講演者の発表終了時に切り替えるという作業が必要になります。試写室を設けてあらかじめ手順になれてもらうことにし，発表会場には会場係の学生のほか，教員スタッフにも詰めてもらい，不測の事態に備えました。ほとんどの発表は順調に行なわれ，トラブルのあった場合は予備のパソコンを使って発表してもらいました。発表者には少し負担かもしれませんが，この方法は今後の大会での一つの選択肢になり得ると思われます。

口頭発表会場は受付から一旦外に出たところが入り口になっており，案内掲示が不備で迷った方もおられました。いつも使っている者からするとこの点は盲点で，申し訳なかったと思います。ポスター会場には多数の発表があっても十分ゆとりをとれる大きな部屋が確保でき，良い会場だったと思いますが，口頭発表会場から少し離れた場所にしかとれませんでした。ポスター発表の時間が過ぎてもまだ説明を聞いている人があり，討論の熱気がなかなか冷めないという藻類学会らしい雰囲気でした。

総会は共通教育棟で最大の講義室で行なわれました。冒頭に堀口会長の挨拶があり，被災者への哀悼の気持ちと，未曾有の大災害のなかで学会を開く意義を述べられました。本来ならばその後，議長選出，議事へと進むのですが，今大会では懇親会を中止したので，通常ならばそこでする大会会長の挨拶ができないので，堀口会長のあとに大会会長として私から歓迎の意を述べるとともに，懇親会中止にいたった経緯を説明し，大会の原点である研究発表と討論を充実したものに

していただきたいと要望いたしました。

懇親会では富山県の日本酒メーカーにお願いして地酒コーナーを用意するはずでした。「お知らせ」に書きましたように富山は魚のおいしいところですから，懇親会でも楽しんでもらうつもりでしたが，それは皆さんの個人的な会合に御任せすることになりました。若手の人たちは総会のあと街で多いに盛り上がったようです。

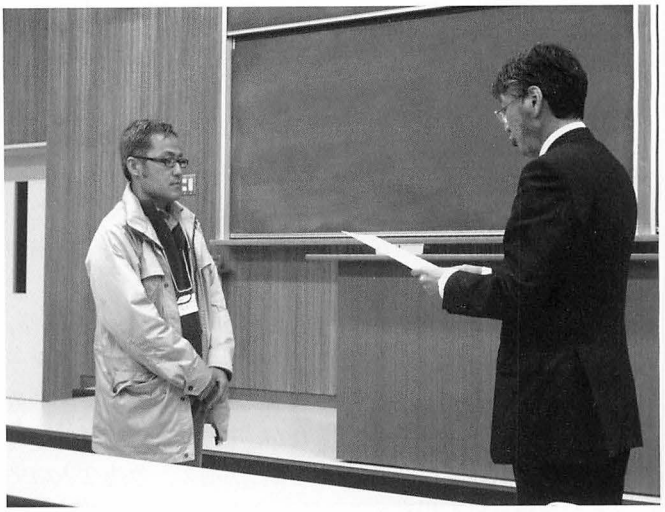
3月28日（月）の朝はさわやかに晴れ渡り，雪をいただいた白い立山連峰が澄み切った青空のなかにくっきりと映えていました。この季節，前線が通過した翌朝の立山は本当に美しく，皆さんに見てもらえてとても良かったと思います。

午前中の口頭発表・ポスター発表と午後の口頭発表はともに順調に行なわれ，ほぼ定刻に発表関係のプログラムは終わりました。また午後3時過ぎにはワークショップ2の参加者がバスで金沢大学の能登臨海実験所に向けて出発しました。3月30日に無事解散し，すべての大会プログラムが終了いたしました。ワークショップ2は藤田さん（東京海洋大）が担当されたもので，大震災の影響で内容を縮小せざるを得なかったとのことでした。

本大会では休憩・展示室と休憩室を1部屋づつ用意しました。休憩・展示室にあてた室は共通教育棟の改修計画の途中で設計が変更になったところで，外から見やすいガラスばりで，長い机と座り心地のよい椅子があり，電気ポットを使用するための電気容量も大きく，休憩・展示室に都合のよい部屋でした。ここではPhycological Researchの峯編集長と出版社のWiley-Blackwellの担当者の柏村さんが，27，28日の昼休みに20分程度の電子投稿の説明会を開催されました。これから投稿から出版までの時間短縮が図られるものと期待されます。また，お茶のコーナーには富山コンベンションビューローの斡旋で富山の水メーカーが500mlのペットボトルを合計250本寄付してくれ，皆さんに自由に飲んでいただきました。3月末の富山では冷たい水を持って行く人はあまりいないのでは，と思っていましたが，すべてなくなってしまいました。やはり安全でおいしい水が一番だったようです。

無線LANは試写室で利用申請してもらい，試写室と休憩・展示室，休憩室で利用してもらうことができました。あらかじめ「お知らせ」に掲載していなかったのですが，約20人が無線LANを利用しました。

富山で学会等のイベントを開催する場合，富山コンベンションビューローがさまざまな形で支援してくださいました。水の寄付の他，開催前にはJR富山駅と富山空港に「歓迎」の看板を出してもらい，開催当日には女性スタッフの派遣があり，休憩室とクロークの仕事をしていただきました。また富山市と富山県によるコンベンションや学会開催の補助事業があり，本大会も申請しており，そのために参加者にはいろいろご協力いただきありがとうございました。



総会での第14回日本藻類学会論文賞表彰式

本大会の受付には「東日本大震災義援金募金箱」を置き参加者からの寄付を募りました。大会終了後の寄付や35回大会実行委員会からの拠出金など合わせて，132,747円を日本赤十字社に寄付いたしました。

東日本太平洋沖地震では本震から1ヶ月経った今も震度6以上の余震があり，復旧にブレーキがかかるなどの影響がでています。原発では汚染した冷却水を海に排水するという，あってはならない事態が現実となり，事故の深刻度はチェルノブイリと同じレベル7と認定されました。農作物や漁業資源の放射能汚染と風評被害が重くのしかかってきています。大震災で被災されたかたや原発で避難されている方が大勢おられ，復興はこれから最大の課題であり長期にわたる努力がもとめられています。少しでもはやく復興することを願ってやみません。

日本藻類学会はこの困難な時期にもかかわらず皆さんの力を結集して大会を無事開催することができました。何人もの方が学会に参加できなかったことは非常に残念でしたが，被災した方をふくめて遠くから大勢をお迎えし，熱心に参加・発表していただけたことは実行委員会としておおきな喜びであり，大会開催の意義をこの状況のなかであらためて確認したという気持ちです。

この稿を終わるにあたり，大会開催にご協力いただいたすべての皆さまに心から感謝する次第です。

（富山大学大学院理工学研究部）

日本藻類学会第35回大会実行委員会
渡邊　信，中村章吾（富山大学），荻田信二郎（富山県立大学），
松村　航（富山県農林水産総合技術センター）